埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Review> A Developmental Study of Young Children's Emotional Communication in Their Family

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金谷, 有子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/176

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

資料紹介

乳幼児の家庭における情動的コミュニケーションの発達的研究

A Developmental Study of Young Children's Emotional Communication in Their Family

金　谷　有　子
KANAYA, Yuko

問題・目的

多くの人にとって生まれ育つ環境は家庭である。家庭という場は情動に満ちた場である。家庭の中で子どもは家族と互いに言葉による言語的コミュニケーションのみならず情動によるコミュニケーションによってお互いの心の伝え合いや影響の及ぼし合いをしていると考えられる（金谷、1994；1995；1998；1999a）。家庭における関係性はひとつだけでなく、夫婦、親子、きょうだいなど複数の関係性が同時に存在している。そしてそれぞれの関係性がお互いに影響を及ぼし合っているシステムが家族関係である。それらの関係性が子どもの情動発達にどのようにかかわってくるのかは興味深い問題である。しかし家庭での情緒的コミュニケーションの実際についての資料は多いとはいえないだろう。

本論の目的は、金谷（1999a；1999b；2003）の家庭における情動的コミュニケーションの縦断的研究の概要をまとめることによって、そこで用いられた分析方法と得られた結果の検討を改めて行い、収集されたデータの今後の分析の方向と理論的視点を探ることである。

方　法

1．対象者

本研究の対象者は乳幼児期の「ビデオ育児記録」という形で縦断研究に参加協力してくれた家族15組である。第１子できょうだいがいない子どもが７名（男児４名、女児３名）年上のきょうだいがいる子どもが８名（男児４名、女児４名で）ある。きょうだいの年齢差は１歳差から11歳差と幅がある。家族構成は、３人家族が７名（１名は後に４人家族に）、４人家族は１名（のちに２名に）、５人家族は６名、６人家族は１名である。家族形態はきょうだいのいる１名のみが祖母と同居の拡大家族で、残りの14名は核家族である。研究開始段階での平均年齢は父親が33.5歳、母親が32.0歳であった。母親は基本的にはすべて専業主婦であるが、子育てに支障のないアルバイト的仕事をしている人は５名である。父親は会社勤めなので対象児と関われる時間は夜か休日である。ほとんどの対象児が１歳半の段階で友だちを持っていて、お互いの家に遊びに行き来している。

2．データ収集法

それぞれの家庭にビデオカメラを貸し出しして、各家庭での様子を母親に撮ってもらった。１歳半、２歳半、３歳半の年齢段階で、１カ月間の間の行動を何日間に渡って撮ってもらった。必要な場面としてお願いしたのは、遊び場面（ひとり遊び、きょうだいやともだちとの遊び、父母との遊び）と日常の生活場面（家族団欒や食事場面、あるいはいざこざ場面）である。録画された時間はどの年齢においても合計５、６時間となった。

3．情緒的交流場面抽出とエピソードの記述

ビデオテープを再生しながら対象児と相手が言語的あるいは非言語的に関わっている場面で、しかも

キーワード：乳幼児、情動的コミュニケーション、情動発達、家庭
Key words ：young children, emotional communication, emotional development, family

対象児や家族あるいはともだちの情動がぶつかり合っている場面や、喜怒哀楽の情動が表出されている場面を抽出していった。日常生活における自然なやりとりの流れの中からお互い共感したり、対峙したり、対立したりしている場面を選んだ。

抽出された場面には始まりと終わりまでの間に何らかのストリー展開が含まれているのでエピソードと呼ぶことにする。やり取りの参加者のことばと表情、顔やその他の身体で表現された感情の内容、動作や行動の内容などを中心に記述した。エピソードの長さは短時間のものから、10数分間続くストリー性の高いものまでさまざまである。

４．母親へのインタビュー

対象児が２歳の時に各家庭において各家庭の情動的環境を探ることを目的に母親にインタビュー調査を行った。

結果と考察

今回はひとりっ子の女児Ｓの事例の分析結果を検討していく。

１．女児Ｓの母子遊びエピソードの要約と考察

(1) １歳半のとき

15分程の母子間のクレヨンで絵を描く遊びのやりとりである。Ｓが赤いクレヨンで紙いっぱいに描いてしまったので母親は青いクレヨンを持って線を描き出す。そして紙の上でこのクレヨンを人に見立てて運動会のかけっこを始める。Ｓは母親の動きとことばの楽しげな調子を受けて自分の赤いクレヨンを動かし始め、母親を見て微笑む。しばらく運動会をしていたが、Ｓは紙をぐちゃぐちゃにし始める。そこで母親が袋を開けてＳに絵を描いた紙をその中に入れさせる。Ｓははじめは母親の指示通りにしたが、途中で気が変わり、クレヨンの箱を取り出し、袋にしまうことを拒否する。

Ｓにはクレヨンでの動きに示された母親の遊び意図の理解とその後の自分の「つもり」とのずれの中に矛盾した心の表れが示されている。

(2) ２歳半のとき

Ｓは直方体の穴があいている形の積み木を手にして考えているお様子である。家事をしている母親の方に振り向いてから､積み木の穴を押しながら「ピ」と言う。この音まねを何回か繰り返して母親に示すが、母親にはＳの遊戯意図が伝わらない。Ｓは口をとがらして再び積み木を向け､「ピ」という。さらに真剣な顔つきで母親を見ながら「ピ、ピ、ピ」という。母親はやっとテレビのリモコンのまねということを理解する。その後はご母子相互に、呼ぶ、応答する、動作するというやりとりを次第に声を大きくしていったり、リズミカルな声で答えたり、笑ったりしながら何回か繰り返す。途中からからかい遊びに展開していった。Ｓは母親のせりふとその感情(愉快な調子）のギャップを読みとって、からかいに発展させていった。現実と虚構の世界を心の中に構築できるようになっていると考えられる。

(3) ３歳半のとき

Ｓの化粧のまねから始まって、化粧道具のお片づけ、Ｓと母親との言葉によるからかい遊びに展開していった10分ほどのエピソードである。Ｓの化粧のまねがおもしろいと感じた母親はもっとおもしろくしようと試みる。その母親の働きかけにＳものっていき、おしゃれをして結婚式という一連のストーリーができあがっていく。化粧をし、ワンピースを着て、花の冠をかぶり、おめかしが完成したＳは空想の世界を演じていく。

片づけ場面で機嫌よく使った物をしまっていくのだが、ネックレスをわざと違う場所に入れるところから、Ｓから母親へのことばによるからかいに発展していった。Ｓは最初何気なくネックレスをヘビに見立てたのだが、母親が否定したので母親の「心」を変えたくてさらにまじめに怖いヘビだと主張した。それでもなお母親は現実を主張するのでＳは自分と母親の主張を折衷してヘビのネックレスと応酬する。母親はその比喩におかしさと気味悪さの二重の意味を笑いを込めつつ言葉では「怖い」という情動表現で応えている。それに対してＳはおじさんなら怖くないはずと空想の世界に遊ぶことができる。母親はおかしくてたまらないのだがＳはうそを本気で演じ

ている。やがて言葉遊びの応酬でこのエピソードが終了していった。

２．女児Ｓと父親との遊びエピソードの要約と考察

(1) １歳半のとき

父親はＳを自分の足に乗せ足を揺らしながら伸ばしてＳを後ろにひっくり返し、また足を屈曲させてＳを引き起こすというシーソーゲーム的な動きを何回か繰り返す。母親はそばでその様子を見て笑い、父親もＳの様子を見て笑う。Ｓも父親と顔を見合わせて笑顔を見せる。（中略）　父親はＳをおもしろがらせようとしたのか、いたずらっぽい顔をしながら、指をもぞもぞと動かしながらＳの方へゆっくりと手を伸ばしていく。Ｓも父親の動きを見ていたが、父親のからかい的動きの意味を理解したのか笑いながら父親に抱きつく。父親もおもしろい顔をつくって笑い、Ｓははしゃいで楽しそうに父親の足元でぐるっと一回転する。（後略）　Ｓはかなり乱暴ともいえる父親の働きかけを受け入れられる。これはそれまでの楽しさの共有体験と信頼関係とに支えられているからこそできると考えられる。

(2) ２歳半のとき

ここでのエピソードはＳは自分の内的世界を父親に伝えられない。Ｓの側には今、父親に発信している自分の内面にあるやりとり遊びのイメージがあり、当然それは父親に通じるものと思っている。ところが父親の方はその意味がわからないので自分のやり方で応答する。しかし、それではＳは満足できない。父親と子どもの「心」は行き違ったまま遊びが展開せず、結局Ｓは自分のイメージの世界に入ってしまってエピソードが終了した。

(3) ３歳半のとき

このエピソードは10分弱だが前半は父子間で行われたテレビの変身もののキャラクターを演じるという身体運動的戦い遊びから始まった。母親はそれを見ながらその様子を実況放送的に描写していたが、後半は母親が次第にふざけてわざとはぐらかす言葉かけをしてからかい遊びに展開していった。

父母子三者の間の遊びのエピソードでは、三者の親しさと温かさを基本にした信頼関係によって、はぐらかしたり、だましたりしてからかいがおもしろさに変っていくプロセスがよく表されている。Ｓの母親は遊び心があって情動の調律も上手であるため、子どもの気持ちの機微を察しながら相互交流をリードしていく。一方、Ｓも母親の遊び心を読みとってからかいに乗っていく。母親は何回かはぐらかしをおもしろがっていたが、楽しさを壊さないためタイミングを計ってＳの求めにまともに応じてＳを満足させて終わらせている。

３．女児Sと同年齢のともだちとの遊びエピソードの要約と考察

(1) １歳半のとき

同性、同年齢の友だちＹとの遊びで物の取り合いが見られた。お互いの「つもり」の行き違いからいざこざが展開していき、母親の調整でなごやかなやりとりへ転換していった。

Ｓは相手に取られるくらいならと思ったのか自分の持っていたおもちゃを投げ捨てる。Ｓの母親は「かじらないで、そんな投げないで」と笑いながら言う。母親は遊びを展開させようと箱の中から指人形を取り出す。Ｓも自分で箱の中から別の指人形を取り出す。Ｙが再びそれを奪おうとしたので傍で見ていたＹの母親が「ふたつあるから１個だけ」と注意する。Ｓの母親はＹに「同じ、同じ」と言う。ＳとＹの二人は自分が持った指人形をみつめる。Ｓの母親はさらに「なにして遊ぶ？」と指を動かしながら演技的声を出して言う。Ｓが「ぞうさん」と言うと、母親が「ぞうさんか、当ったり！」と笑いながら言う。Ｓはうれしい気持ちになったのか、Ｙの頬に自分の人形をくっつける。「いっしょににらめっこしましょう」と母親が人形を動かして誘うとＳも母親の動きに共振してはしゃいで笑う。母親も笑ってこのエピソードが終了する。

(2) ２歳半のとき

10分程のごっこ遊び的やりとりで、相手の子どもは１歳半の時と同じ女児Ｙである。二人は自分たちが母親になったつもりでそれぞれの人形を抱いて、夜寝て、朝起きるという一日の生活のイメージを即

興の演技とせりふで再現しながら役割交替遊びを展開していく。

Sが母親になったつもりの表現なのかYの人形を取って抱くとYが「だめ、これ」と取り戻す。Sが自分の人形を抱いてソファの端を枕にして横たわる。Yに空いた場所を提供する。Yが「ちょっとせまいねー、せまい、おきよう」と言うと、Sも「いいよ」と同意して二人とも起き上がる。人形を寝かせ、電気を消すまねを繰り返す。Yがまた「ねるの」と言うと、Sも一緒にソファをかぶって寝るまねをする。Yが「あさだ、あさだ」と言うと、二人は跳ね起きてこのエピソードが終了する。何かのふりをして遊んだり、ごっこ遊びをする傾向は親のサポートが重要である。Sの場合もこれまでの父母の情緒的支えが影響していると考えられる。

(3) ３歳半のとき

幼なじみの三人S（女児)、Y（女児)、F（男児）が、いざこざ、自己主張、なぐさめ、気づかい、協力という様々な社会的感情や行動を示している。FとSは物の取り合いからいざこざになるが、Fにとってはsが一回くらい貸してくれるだろうという予測があるが、Sにとってみると仲良しのFが自分の物を取ってしまうとは心外だったと思われる。FはSの泣きに逃げ出してしまうが、もう一人の幼なじみYはSの状況を同情し、何とか慰めたいと思っている様子がわかる。このときYが示した思いやりに報いるようなSのYを気づかう行動がその後のかけっこで見られるのである。FはSが泣きやんだ頃に再びちょっかいを出しにやって来るが自分の母親に注意されちょっかいをやめる。最後に三人がかけっこを終えて戻り、Fがしていた運動動作をSがまねをし、YがSのまねをしていく中で笑いが起こり、和やかな情動の伝染と調和的行動で一連のエピソードが終了していった。

２．母親のナラティヴからの分析結果

(1) 夫婦げんかについて

言い争いをすることがあると答えたのは全体の33.3%、その８割が一人っ子の家族であった。夫婦がまだ友だち的感覚をもっており、言いたいことを言い合ったり、子育てに慣れていない母親に父親が口を出すということもあるのだろう。言い争いがあっても、否定的感情も肯定的感情も自由に表出でき、よくコミュニケーションがとれているケースは、母親自身のイライラはあまりないと答えている。きょうだいのいる家庭では言い争いや夫婦げんかの原因も終結もすべて子どもがからんでくると答えている。

親の言い争いに対する子どもの反応については、「険悪な雰囲気がわかるのかあっち行ったり、こっち行ったり、何か笑ってみたり、子どもなりに気をつかっている」、「声のトーンでわかるのか、父親と母親のところを行ったり来たりする」という回答であった。

一方夫婦げんかはしないと答えたケースのほとんどは「父親は忙しくて言い争いをする時間がない」、「話し合いたいがあきらめている」、「言いたいことはあるが言えない」、「お互いががまんしている」、あるいは「すべて母親にまかされている」と答えている。

(2) きょうだいげんかについて

きょうだいげんかをしょっちゅうするという答えが12.5%、きょうだいの組み合わせによるという答えが37.5%、最近少しが12.5%、あまりしないが37.5%であった。

年齢が近く、しかも幼児期の３人きょうだいのケースでは、対象児は泣きが多く、しかもいったん泣くとなかなか泣きやまなので母親はいつもイライラすると答えている。また父親は子育てに協力的でなく、子どもを叩いたりするという。きょうだい同士も引っ掻いたり傷つけると言い、家庭の情動的雰囲気は否定的なものが支配していることが多いと推測された。しかし、きょうだいげんかが子どもの発達にとって必ずしも否定的な影響ばかりを与えるわけではない。問題は父親の無理解と母親のストレスが子どもにどう影響するかであろう。

三人きょうだいの場合年の近い子ども同士の争いは多い一方、一番上の子どもが下の二人の調整役になっていることが多いことがわかった。親に対してよりもきょうだいの方に従うこともあるという。年齢が離れている場合は対象児をかばったり、面倒を

みてくれることの方が多いようだ。また一番下の対象児は、上のきょうだい同士の争いを見ながら、自分は巻き込まれず傍観していたり、母親に言いつけに行ったり、自分が叱られるときのようにきょうだいを叱る真似をしたりもしている。きょうだい同士のけんかを見ながら情動調整を学んでいるともいえる。

(3) 叱るのはだれ、そして叱るときたたくかどうか

父親が叱ると答えたのは全体では33.3%、一人っ子では42.9%、きょうだいのある子どもでは25%であった。残りはめったに叱らないという答えであった。母親が叱ると答えたのは93.3%であった。

叱り方として、母親は「感情的に声できつく叱る」と答えた人が一番多かった。父親の叱り方は、「めったに叱らないが、叱るときは声で言い聞かせる」が40%であった。「めったに叱らないが叱るときは威厳があるきついことばで」と答えたのは三人の男の子の父親で、「めったに叱らないし、叱っても本気でないことばで」と答えたのは一人っ子の女児の父親であった。

母親の叱り方は感情的であることが多く、子どもはそれに対して「泣かない」、「知らん顔」、「平気」、「はぐらかす」、「いじけない」、「怒る」、「とぼける」、「のってこない」などの反応を示している。母親の感情的な叱り方は子どもにとって慣れっこで効果がないともいえる。しかし、母親が本気のときは母親の顔色をうかがい、きげんをとってくることがあるという答えもあり、子どもは親の意図や本心を読みとれるともいえる。同じようにめったに叱らない父親に叱られた場合でも、父親が本気でない、真剣でない叱り方だと、子どもは平気、知らん顔という反応を示すという。しかし、日頃、母親が子どもたちに父親を恐く、威厳のある存在として話していて、しかも父子の間にあまり会話がないケースでは、母親が父親を呼ぶだけで子どもは怖がると答えた。

叱るときに叩くかどうかの質問に対して、叩くと答えたのは40%だった。母親は叩くが、父親は叩かないというのは26.7%、きょうだいのいる子どもでは37.5%、一人っ子の場合は14.3%であった。一方、叩かないと答えたのは60%であった。きょうだいのいる子どもの方がきょうだいげんかで親に注意され、叩かれる状況になることが多いとも考えられる。

叩くと答えた人のうち両親とも叩くと答えたのは２ケースであったが、どちらも夫婦げんかはしないが、そのためにかえって母親のストレス発散ができないケースであった。叩かれた子どもの反応は、母親に対しては怒り、反抗的になり、手がつけられなくなるという。父親に対しては素直に叩かれるままで、表情も変わらないと語っている。父親には本心や感情を出さないように思える。もう一つのケースでは、母親は長男に厳しく、一番下の次男に甘いが、反対に父親は長男に甘く、口で叱るが、次男には厳しく、すぐ手が出ると答えた。真ん中の子どもの女児は父母どちらからもあまり叱られないようだ。

きょうだいのいる子どもの方が、叱られたり、たたかれたりすることが多いという結果が示された。きょうだいのいる子どもの方が複雑な家族間の情動的相互作用を経験していることになる。子どもが生活している情動環境としての家庭の中で、親が自分を叩いたり、きょうだいが叩かれるのを頻繁に経験するとしたら、その子どもの情動発達や情動調整にどのような影響があるのかについての検討が必要であろう。

(4) これまでに示された自我感情や社会的感情

２歳までに家庭において表出された情動を調べた。「すねる」、「悔しがる」、「頑固」、「我を通す」といった自我感情は、15名中13名（86.7%）が表出されているという回答だった。「悪いと思う」や「照れる」の表出も７割強が報告された。これは一人っ子でもきょうだいのいる子どもでも同じ傾向であった。しかし、「頑固」や「我を通す」に関してはきょうだいのいる子どもの全員があると報告している。きょうだいの中で自己を主張する経験は一人っ子の場合より多いからであろう。

「わざとする」、「からかう」、「はぐらかす」といった他者の意図を読み取りながら相手と交渉するような情動表出は一人っ子もきょうだいのいる子どもも８割以上報告されている。また他者の感情への共感を示すような感情表出である「慰める」、「援助する」、「思いやる」もほとんどの子どもに見られる。

きょうだいのいる子どもと一人っ子とで違う点は、「やきもちをやく」、「甘える」、「得意げ・自慢げ」、「慰める･援助する･思いやる」の４種類であった。きょうだいのいる子どもは一人っ子よりも、やきもちをやくことが多く、甘えるのが少なかった。ほめられて得意になったり、自慢したりも少なかった。慰めたり、援助したり、思いやるのもやや少なかった。一方、一人っ子は両親を独占できる立場なので、やきもちは少なく、甘えや得意になることも多く、親を手伝ったり、慰めたりすることも多いという結果であった。

以上のような結果から示唆されることは、家族構成や家族布置の違いが子どもの情動表出に影響しているのではないかということである。それが情動理解や情動調節の発達にどのように影響するのかについてはさらに研究する必要がある。

今後の課題

今後の課題は３つあげられる。第１に観察データ分析の視点の検討、第２に観察データ分析方法の精緻化、第３に新たな理論的視点の探索である。

第１、第２の課題として本研究は観察データは豊富にあるのだが、明確な視点を持って意味あるデータを抽出できなければ有用なものにならない。情動のぶつかり合いや情動の調整をどのように描き出せるかが大きな課題である。

第３の視点として情動語の表出や情動調整の発達に関する先行研究の精査があげられる。家庭での会話分析をすることによってわかることがある。親子間の情動に関する会話の量や、情動が生じた原因について話す量、あるいはテーマの種類が多いほど後の情動理解が優れているという研究がある（Dunn他、1982；1987；1991）。きょうだいとの会話やともだちとの会話の中で子どもは情動を含む内的状態についてどのくらい使っているのかの研究によると親と一緒にいる時よりきょうだいや友だちと一緒の時の方が２倍多く使っているという。それはきょうだいや友だちとのごっこ遊びで多く表出されるからである。ごっこ遊びをする程情動の理解力が高くなると考えられる（Dunn, 2004）。

親の情動調整をモデルにして子どもは自分の情動調整を発達させていくという報告がある。また親は情動調整の方法を具体的に教えるという役割を担うという知見もある。新たな視点から家族間の情動調整の方法の研究の検討が必要であると考える。

引用・参考文献

Dunn, J. and Kendrick, C. (1982). *Siblings: Love, envy and understanding.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Dunn, J., Bretherton,I., & Munn, P. (1987). Conversations about feeling states between mothers and their young children. *Developmental Psychology, 23,* 132-139.

Dunn, J., Brown, J., & Beardsail, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of other's emotions. *Developmental Psychology, 27,* 448-455.

金谷有子（1994）．母子遊びにおける感情信号の性質と機能　国学院短期大学紀要　第12巻

金谷有子（1996）．母親との情動交流における乳幼児の自他の内的状態理解の発達的研究　国学院短期大学紀要　第14巻　59-75

金谷有子（1999a）．乳幼児の「対話する心」―家族やともだちとの楽しい遊びや対立からの分析―　国学院短期大学紀要　第17巻　3-25

金谷有子（1999b）．乳幼児と母親及びきょうだいとの争いやからかいに見られる情動調律と他者の心の理解　文部省科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書

金谷有子（2003）．家庭の情緒的雰囲気と家族風土の発達―母親のナラティヴからの検討―　国学院短期大学紀要　第20巻　37-51